

## I プロローグ

「おはようございます。読書に来ました。」

登校した子どもたちは、朝のマラソンの後、思い思いの本を片手に校長室を訪れる。全校生4人。それぞれが椅子に座り、静かに読書が始まる。職員も朝の準備を終えると、同様に校長室で思い思いの本を読む。ほんの数分間ではあるが、校長室は、本のページをめくる音だけがかすかに聞こえる空間となる。

午前8時になると、児童が輪番で進行を務める「全校朝の会」を行う。全児童、全職員が一同に集い、あいさつを交わして朝の歌を歌う。その後の朝のお話は職員が輪番で子どもたちの実態に応じた説話をし、子どもたちはその内容を記録として残す。

登校後に意図的に組み込んだ、マラソン（動）→読書（静）→あいさつと歌（動）→朝のお話（静）という流れである。しかも、毎朝繰り返されるこの流れの中で、全校生と全職員が交流を図ることもできる。

全校生が4人だからこそできることもある。少人数であることは、決してデメリットではない。他校と同じような教育活動をしようと思えば難しいこともある。しかし、白水小学校だからこそできることもたくさんある。私たちは、互いに知恵を出し合い、本校の教育活動を創造しようと努めてきた。



【朝の読書の様子】

## II 研究主題の設定

明治34年に常磐炭鉱の私立学校として開校し、昭和30年代には児童数が700名を越えた白水小学校は、炭鉱の閉山に伴って児童数が激減し、平成10年以降は全校生が10人前後で推移してきた。平成29年度は全校生が4名という県内でも屈指の小規模校である。

社会の変化に伴い、「アクティブ・ラーニング」が教育界での大きな流れとなり、集団での学び合いを推進する学校が多く見られる中、本校では、3年生が1名、5年生が2名、6年生が1名という状況で授業を実践しており、共に学ぶ仲間との様々な意見交換によって学びを深めるという環境をつくることは困難な状況にある。

しかし、私たちは「少人数というのはデメリットだろうか。」と常に自分たちに問い続けてきた。県では独自の少人数教育を立ち上げ、少人数学級や少人数指導を推進している。それは、一人一人の児童に目が行き届く個に応じた支援がしやすい環境であるからに他ならない。

「現在の白水小学校は、個に応じた細やかな支援ができる恵まれた環境にある。」というとらえのもと、私たちは、県や市の施策を踏まえつつ、白水小学校の環境を最大限に生かした授業とはどういうものかを模索しようと研究をスタートさせた。



【昭和30年代の白水小学校】

## 研究主題

## 少人数のよさを生かした、児童が主体的に学ぶことができる授業の創造 ～「実態把握」と「教材研究」による「個に応じた授業」のあり方～

本年度4月、福島県教育委員会より「ふくしまの『授業スタンダード』」が公表され、その推進が各校に求められるようになった。そこでは「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の実現が副題として掲げられていることから、多様な他者との協働の学びが重視されていることが分かる。

本校では、この『授業スタンダード』を基に、どのように授業を実践していくべきかについて話し合いの場をもった。

「個の主体的な学びは、教材との出会いによって引き出すことができる。」

「その教材を個の実態をもとに工夫することができるよね。」

「ペア・小グループ、全体での話し合いという段階で思考を深めることが難しいなあ。」

「マンツーマンの授業では、教師との話し合いにならざるを得ないからね。」

「でも、その話し合いの場では、すべてをその子どもが受け止めることになるよ。」

「個の活躍する場面が多い授業になる。」

「すべての子どもに対して支援することが可能だよね。」

「ということは、すべての子どもを自力解決に導けるんじゃない。」

「自力解決ができたのなら、その過程を説明することが言語活動につながっていく。」

様々な意見を出し合う中で、本校で目指すべき授業というものが少しずつ見え始めてきた。

そこで、対象の教科を算数科に絞り、本校の環境の中で取り組んでいく「白水小算数科スタンダード」を作成していった。

集団での学び合いが成立しにくい環境であるが、反面「個」の学びは保障される。「白水スタンダード」には、「個」が主体的に学べる「個」の実態に応じた教材を工夫し、「個」の実態に応じた支援をすることで、「個」が自力で課題を解決し、すべての「個」がその過程を自分の言葉で説明をすることが可能であるということを盛り込むこととした。

また、「個」を主体的な学びに向かわせるための教師の支援のあり方についても、検討を重ねていった。そこでは、個の学びの姿を見取り、今、支援をしなければならない状態なのかどうかを判断する必要があった。教師との関わりが強い少人数での授業の中では、どうしても教師に頼る傾向が強くなる。児童が自力解決に向かっている際に、思考しているのか、思考できずにいるのかを適切に見取り、見守るスタンスを取るのか、何らかの支援をするのかは、主体的な学びに向かわせるためには重要なポイントとなる。

その的確な見取りと支援によって、どの子も自力解決ができ、その解決方法を理解し、自分の言葉で説明することができれば、実感を伴った自信となり、次の学びの意欲の高まりにつながっていくであろう。

それを日常的に授業として繰り返すことで、主体的に学ぶ本校の児童を育てていきたいという思いを込めて「白水スタンダード」を次のようにまとめた。

# 白水小学校 算数科スタンダード

■は特に大切にしたい手だて

授業前	実態把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 本単元を学ぶために必要な既習内容の定着を確認する。</li> <li>□ 児童の説明力の高まりをどこまで目指すのかの指標を設定する。</li> <li>□ 本単元の基礎となる既習事項の復習をする。</li> </ul>
	単元構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 定着させる学習内容を把握し、問題解決学習を位置付ける。 教師側で指導すべきことはしっかりと、児童に考えさせるところはじっくりと</li> <li>□ 単元の時間配分を工夫する。</li> <li>□ 児童の興味・関心を高める教材の検討をする。</li> </ul>
↓ 学習用具がきちんとそろっていることを確認して授業を始める。		
導入	教材との出会い	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 本時で活用する既習事項の振り返りの場を設ける</li> <li>□ 具体物を提示することで、イメージをつかませ、意欲を高める</li> <li>□ 比較・対比によって、同じ点や違う点に焦点化を図る</li> <li>■ 児童との対話を大切に、課題への焦点化を図る。</li> </ul>
	課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 単元の全体計画による本時の課題設定の場合</li> <li>□ 本時に乗り越える新たなハードルとしての課題設定の場合</li> <li>■ 課題(あめて)は黒板へ青で板書し、児童のノートに転記させる。</li> </ul>
↓ 本時の学習への焦点化と学習意欲の喚起・向上を目指す なるべく短時間で課題を設定する		
展開	解決の見通し	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 答えを予想させる。(こうだから、こうなるはずだ)</li> <li>□ 手だてを予想させる。(前時に学んだ〇〇が使えるぞ)</li> </ul>
	自力解決	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 解決の様子を見取り、つまずきをとらえる。</li> <li>■ 支援を必要としているかどうかを見極める。</li> <li>■ 必要最低限の支援により、自力解決に導く。</li> <li>□ 個別指導を中心とし、一斉指導は行わない。</li> <li>■ 誤答はこの段階で修正させる。</li> </ul>
	解決方法の説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 発表の準備をさせる。</li> <li>■ 児童に解き方の説明をさせる。(教師の居方) 「まず…、次に…、最後に…」を使って…</li> <li>■ 問い返しや質問をすることで、説明する力を高める。</li> </ul>
	解決方法の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 違った視点を与え、別の解決方法に取り組ませる。</li> <li>□ 教師から別の解決方法を提示し、考え方を比べる場をもつ。</li> <li>□ 教師側の一方的な説明にならないよう配慮する。</li> </ul>
↓ 児童自身が自分の解決方法を理解し、説明できるようにする。 展開の段階で、どれだけ子どもの言葉を引き出すことができたかがポイント		
まとめ	適用・練習問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 児童が自分で考えた解き方で問題を解決させる。</li> <li>□ 新たな解き方で問題を解決させる。</li> </ul>
	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 本時で新たに学んだことを振り返る場を位置付ける。</li> <li>□ 児童の言葉を引き出し、まとめとして赤で板書する。</li> </ul>
↓ 1単位時間の授業を振り返る。(やり残しは？ 手だての効果は？)		
授業後	定着の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 宿題、ドリルタイム等を活用し、類似問題を解く場をもつ</li> <li>□ 単元末には、問題解決～説明まで位置付ける。</li> </ul>
	次時、次単元へ	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 授業としての振り返り(効果的な手立ては、今後の課題は)</li> <li>□ 本単元で学んだ説明力の活用(練習問題で、他教科で)</li> <li>□ 次の単元における説明力の指標の設定</li> </ul>

### III 研究概要

#### 1 実態把握とその分析

本校の環境では、アンケート調査のような統計的な手法はあまり意味をなさない。日常的に個の実態の把握が十分にできることと、サンプル数が極端に少ないために、調査データとしての信憑性が低いからである。

また、個に応じた指導の継続により、実態は刻々と変容していく。そこで、本校では、日常の授業観察を中心として、それを補う資料としての個人カルテ（国語科・算数科）による実態把握を行っていた。

個人カルテは、全学年、全単元のワークテストの観点別正答率と観点別、領域別の平均正答率、年度末に実施するNRTの観点別正答率、県学力検査、全国学力学習状況調査の正答率を記入し、さらに、つまずきの見られた内容等について文章記載するようにした。

上段には、知能検査やNRTの結果を入力

県学テや全国学テの目標値を分析により検討が可能

中段には、すべての学年・単元毎のテストの観点別正答率を入力

学年でのつまずきなどを記載する。

【算数科個人カルテ】

個人カルテは、単元テストの正答率等を記載することで学期末の成績処理等にも活用することができ、また、文章記載を極力少なくすることで取り組みへの負担感を少なくするようにした。さらには、1枚の紙で六年間の学びの様子が概観できるようにし、正答率等の数値のデータ量が多いことで、個の学習成果の分析を図ることができるものにした。

担任は、単元毎のテストを終えると、この個人カルテに正答率を入力し、つまずき等が見られた場合には文章で端的に表記する。同時に、次の単元に関わる既習事項の正答率等を確認することもできる。この個人カルテを分析することで、一人一人の得意としている観点や領域、つまずいているポイント等が見え、それに対しての対応策や手だてを講じることが可能になってくる。

## 2 実態に応じた教材との出会いの創造

児童一人一人の細かな見取りと実態分析により、その子どもに応じた教材との出会いを創り出すことが可能となってくる。

導入時には、教科書の教材を参考として、その子どもの興味・関心がある内容、数値の設定、実物の提示か半具体物の提示か、教師の実演か児童の試行かなど、一人一人が課題意識を明確に持つことができるような仕掛けをすることが可能となってくる。

また、導入時に、複数の児童どうしが個々の考えを重ねるといった場面がない分、時間は確保できる。第6学年では、「比と比の値」の導入時において、児童の興味・関心を高めて主体的な学びにつなげるために、以下のような導入にした。



【児童の関心を高める教材の提示】

(教師の実演) A：カルピス 1 水 4 を混ぜ合わせる。

B：カルピス 2 水 5 を混ぜ合わせる。

発問 「AとBのカルピスは同じ濃さですか。違う濃さですか。」

「それは、どうしてですか。」

「BのカルピスをAと同じ濃さにするためには、どうすればよいですか。」

6年児童は、算数科の思考力があり、根拠をもとに説明をする力もある。また、目の前に実物を提示することで学習への関心を高める傾向もある。事前に、Aのカルピスからそれぞれ1杯ずつを加えたBのカルピスの濃さを「違う。Bが濃いはずだ。」と言うことは予想ができていた。そこで、BをAと同じ濃さにすることを中心に思考させ、その根拠を説明させることで、等しい比の概念を理解させたいと考えた。

## 3 自力解決時の教師の支援のあり方

一人一人の児童の実態に応じた導入を創り出すことによって、自分の課題ととらえた児童は、自力解決に向かう。本校においては、児童と教師のかかわりが強いために、安易に教師に頼ったり、教師が安易に解決のヒントを与えたりする傾向があった。

児童が自力で課題を解決するために、教師側がどのような支援をしていくかは、主体的な学習を保障するために重要なポイントとなる。

### (1) 解決のための見通しをもたせるために

課題をとらえたとしても、自力解決の糸口を見出すことができなければ、その先に進むこと



【算数コーナーによる支援】

はできない。児童自身が既習事項からその糸口を選択することができれば、教師はそれを認め、見守るスタンスをとる。

しかし、その糸口が見いだせない場合はどのように支援していけばよいか。第3学年では、児童の実態を考慮しながらも、教師側で安易にヒントを与えることを避けるために、本時の課題解決に必要な既習事項を算数コーナーとして掲示し、その掲示物の中から児童自身が糸口を選択できるようにした。

## (2) 価値ある沈黙を大切にす

教師側で何らかの発問をした際に、その発問が児童の思考を促すものであれば、児童側には、思考するための時間が必要になる。児童が少ない本校では、他の児童が発言をしない分、沈黙の時間となる。わたしたちは、この児童が思考している沈黙の時間を「価値ある沈黙」として大切にしてきた。

教師は、授業において教室が静まり返ることを恐れる傾向があり、つい質問を繰り返したり別の言葉で言い直したり、あるいは考え方を示したりしてしまいがちである。目の前の児童の様子を的確に見取り、思考している、あるいは思考の糸口を見つけようとしているのであれば、「価値ある沈黙」としてその時間の保障をするよう心掛けた。

しかし、ある程度の時間を与えても糸口が見つからないような場合を想定し、使うか使わないかは別として、ヒントとなるような支援策を準備しておかなければならない。

## 4 言語活動による表現力の育成

本校の「白水スタンダード」においては、すべての子どもが自分の解決方法を自分の言葉で説明することができることをねらいとしている。

課題を教師の支援を得て解決したとしても、その方法を自分自身が理解していないと、自分の言葉で説明するのは難しい。子どもたちにとって、問題を解決することがゴールではなく、その解決方法を理解し説明することがゴールとなる。

本校では、子どもたちが説明をするにあたって、3段論法で話ができるように繰り返し指導してきた。「まず・・・」「次に・・・」「そして・・・」という言葉を使って説明することである。この説明方法を取り入れることによって、自分の解決方法を3つに分けて説明しようとする意識をするようになる。例えば単純な課題であっても、「立式の意図」「立式と計算」「答え」と3つに分けて説明するようになってくる。こうした説明手順を身に付けていくことが、算数科における表現力の育成につながるものととらえ、継続して指導している。



【3段論法での説明】

## 5 話し合いによる教師の果たす役割

児童が解決方法の説明をする場合は、必然的に黒板の前に立ち、自分の思考の足跡が見える資料（直接黒板に書く場合もある）を指し示しながら話すこととなる。しかし、3年生、6年生は児童が1名であり、その説明を聞く他者の存在がない。

そこで、児童が説明のために黒板に立つ際には、教師は児童の席に座り、聞き役となり、必要に応じて質問者ともなる。

ここで、教師に求められるのは、「児童役」という意識である。教師は児童の自力解決を見取っているために、児童の説明が言葉足らずであっても、勝手に意図を解釈して聞き取ってしまうことがある。今、流行りの言葉で言えば「忖度」してしまうのである。

わたしたち教師は、説明する児童と同学年の同じ仲間として説明を聞き、「〇〇のところがよく分からないから、もう一度説明してください。」とか「ちょっと早口で聞き取れなかったので、ゆっくり話してください。」など、児童の説明が根拠に基づき、順序立てたものになっていくようにしていくことを心掛けてきた。



【児童の説明時の教師の居方】

#### IV 算数科以外での本校の取り組み

白水小学校では、算数の授業づくりの他にも、少人数であるメリットを生かした教育活動や、少人数であるデメリットを補填する意味合いの教育活動を工夫して実施している。

##### 1 学校行事

###### (1) 宿泊体験学習

宿泊体験学習は、日頃4人で生活している子どもたちが他校のたくさんの子どもたちと触れ合う機会にもなる。本年度の宿泊学習では、朝のつどいの際に、当日にいわき自然の家を利用している団体の学校紹介をすることになった。わたしたちは、この機会を、本校の子どもたちが大勢の人の前に立ち発表ができる有意義な機会であるととらえ、子どもたちに達成感を味わわせたいと考えた。

そこで、事前指導において、白水小学校をどのように紹介するかの話し合いの場をもち、見ている人たちに伝わるような資料を準備し、たくさんの人に聞き取れるような声で発表することができるよう練習を重ねて当日の発表に臨んだ。

緊張しながらも、大きな声で自分たちの学校の紹介をした子どもたちは、ひととき大きな拍手をいただき、満足そうな笑顔で朝のつどいを終えることができた。

日頃、少人数で過ごしている子どもたちが大勢の中に入ると、必要以上に委縮してしまったり、緊張して話すことができなくなったりする場合も少なくない。このような機会に、しっかりと成功体験を重ねることが、子どもたちの自信へとつながるものであると考えている。



【宿泊体験学習での学校紹介】

一方、少人数による宿泊体験学習においては、個々の自然体験活動が充実したものになるということを実感した。計画を立てる段階で、人数が少ないことがデメリットとなり負担が大きくなる野外炊飯等の活動を見送った。カヤック乗り体験は、児童の人数が少ないことがメリットとなり、活動時間のほとんどを待ち時間なくカヤックに乗る体験に充てることができた。様々なプログラムがある中で、個の活動の充実に絞り込むことが、宿泊体験学習という貴重な自然体験の場を充実させることにつながった。



【充実した自然体験 カヤック乗り】

## (2) 方部音楽祭

全校生4人でいわき市のアリオス大ステージに立ち、音楽発表をする方部音楽祭も、子どもたちの自信を得る場のひとつでもある。数十人でひとつの音楽を発表する他校の演奏を聴き比較しても自分たちの演奏に自信をもって取り組ませていきたい。そうした思いから、この合奏曲の練習にも時間をかけて取り組んできた。

演奏曲「剣の舞」は4人が奏でる4つの音だけで作り上げた曲であったが、会場に集まった観客はその4つの音が奏でる曲に聴き入り、そして盛大な拍手を送ってくれた。悔いが残らない演奏ができた子どもたちの思いは、やり遂げた自信につながっていった。



【方部音楽祭 アリオス大ステージ】

## (3) しらみず祭り

本校の学芸的行事である「しらみず祭り」も、同様にたくさんの人たちの前で発表をし、成功体験を積む貴重な場のひとつである。

本年度は、開幕劇、体育発表、作文発表、音楽発表、劇の発表と多種多様な発表の場に4人の子どもたちが臨んだ。よりよい発表にすることを個々が課題としてとらえ、何度も練習を重ねてひとつずつ仕上げていった。

保護者や地域の方々、子どもたちが招待状を届けたお年寄りのみなさん。多くの方々の前で、どれも堂々とした発表ができ、後日、参観者からお礼の手紙をいただくことができた。たった4人でも、これだけの発表ができたという自信は、今後、大きな中学校へ進学した時に生きて働くものになると信じている。



【しらみず祭りでの劇発表】

## 2 全校道徳

次年度から先行実施となる「道徳科」の準備も兼ね、4人の子どもたちが「思考し、議論する道徳」に取り組むことができるよう、本年度から、全校道徳を実施している。

毎月1回、全校生4名と校長、教頭、担任2名の8名がひとつの教室で輪になって座り、主にモラルジレンマ資料を扱ってそれぞれがどうすべきかについて意見を述べ合うものである。

全校道徳を実施する前に、教師側では打合せを行う。資料を読み合い、子どもたち一人一人を想定し、「〇〇くんはこっちの立場に立ちそうだよね。」「きっと〇〇くんはこういう主張をしてくるから、こんな言葉かけをしてゆさぶっていきたいね。」一人一人の実態をとらえているからこそ、個に応じた支援策が浮かんでいく。

4人という固定された人間関係の中に、教師それぞれが関わり、ゆさぶりをかけることで、議論が深まり、子どもたちの道徳的な考え方にも変容が見られるようになってきた。

この全校道徳の授業は、学校へ行こう週間の際の一日公開日にも実施し、保護者や地域の方々にも参観していただいた。



【全児童と全教員による全校道徳】

## 3 他校との合同授業の実施

本校では、より多くの仲間と共に学ぶ体験を積むために、昨年度より近隣の宮小学校、内町小学校に出向き、授業に入れていただく機会を学期に数回、設けている。

本校ではなかなか感じるできない仲間と共に学ぶこの体験は、子どもたちにとっては大きな刺激となっている。今年は5年生が初めて宮小学校の5年生の教室に入り、いっしょに音楽の授業に参加することができた。



【宮小学校での合同授業】

「緊張する。」「行きたくない。」そんな後ろ向きの言葉を言っていた子どもたちが、授業後には、「楽しかった。」「また行きたい。」「今度は〇〇の授業がいいな。」と前向きな言葉を発するようになる。個に応じた指導によって培った知識や技能を多くの仲間の前で発表することで自信を深める児童もいる。しかし、中にはなかなか溶け込むことができずに、自分から関わりをもてない児童もいる。このような児童に対して、次の合同学習ではどのような声掛けをし、どのような準備をしていくかを検討することも、個に応じた支援のひとつである。

## 4 全校朝の会

昨年度の学力の実態分析により、本校の児童の国語科における「聞く力」を高めることが課題であることが明らかになった。少人数であるために、一度できちんと聞くことができなくても、聞き

直しをしたり、教師が再度伝えたりすることが習慣となっていることも起因しているのかもしれない。

本年度は、国語の時間はもとより、学校生活全般を通して、聞く力を高める取り組みをしていく必要があった。

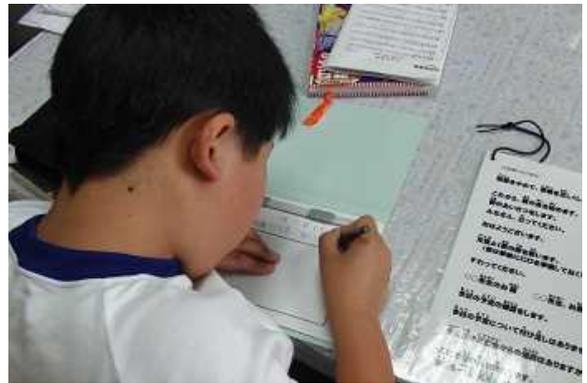
プロログでも触れたが、本校では人数が少ないメリットを生かして、毎朝、校長室で読書をし、その後、全校朝の会を行っている。全児童と全職員が毎朝、顔を合わせ、あいさつを交わし、歌を歌い、朝の先生のお話を聞く。この、毎朝、先生方のお話を聞く機会を、「聞く力」を高める場として位置づけ、集中して内容を整理しながら聞き、その内容を聞き終えた後に記録して残す取り組みを継続して行ってきた。

話す側の教員も、子どもたちが聞き取って記録することを意識して話すようにした。話す内容は様々で、子どもたちの生活から改善して欲しいことを話したり、最近読んだ本から興味をもって欲しい内容をピックアップしたり、短いお話の読み聞かせをしたりすることもあった。

子どもたちが記録するためには、いかに記憶に残る話をするかも話し手である教員には大切であり、資料を準備して話すことが多くなってきている。この朝のお話の場は、私たち教員にとっては、児童に向けた話をする実践研修の場でもあり、児童にとっては、聞き方を身に付ける学習の場にもなっている。



【全校朝の会で教師の話聞く子どもたち】



【聞いた話の内容を思い出し記録する児童】

## 5 全校体育

基本的に、体育の授業は全校生で行っている。器械運動や陸上運動など、個の体力や技能を高めることは、個に応じた支援がしやすい環境にあり、容易ではある。

本年度は、児童の新体力テストの結果や児童の日常の運動の様子から、基本的な体力、特に持久力が本校の重点課題であるにとらえ、4月から登校後に「朝のマラソン」に取り組ませてきた。1週100mの校庭を当初は5周することから始めて、継続しているうちに、限られた時間内に6週、7週と走る距離を伸ばすようになり、11月に実施した校内持久走記録会では、全児童が昨年度の記録を大きく更新することができた。また、運動をすることで基礎代謝が上がり、日常的に薄着で過ごすようになり、昨年度に比べて、体調を崩して欠席



【朝の全校マラソン】

する日数が激減している。

一方で、球技等のゲームは、4人という環境では実施が困難である。そこで、校内での体制を工夫し、職員もいっしょに体育に参加することで、球技のゲームを体験することができるようにしている。

その中でも、サッカーのゲームは4人の子どもたちは熱中して取り組むことができた。チームに入っている教員はパスを出すことを中心としてゲームに参加しているため、児童は常にパスを受けたり、ディフェンスをしたりと、休む間もなく走り続ける。少人数でのサッカーではこれが通常のもので、1試合での子どもたち個々の運動量はかなりのものとなる。また、ボールタッチする回数も多くなり、自然と技能も高まってくる。活躍する機会が多くなることも少人数でゲームをすることによるよさのひとつである。



【子どもたちも大好きな全校サッカー】

## 6 外部人材や校外施設の活用

### (1) 地域の方々との交流

白水小学区にお住まいの方々は、学校に対してたいへん協力的である。「人数が少ないから、私たちにできることがあったらいつでも教えてください。」そんな言葉をいつも頂いている。

毎年11月の学校へ行こう週間には、地域の方々との交流会を行っている。子どもたちが地域の方々に質問をして、その質問に答えていただくことが会の中心である。今年は、昔の白水小学校の様子について子どもたちが質問をしたところ、当時の卒業アルバムを持参して写真をもとに当時のエピソード等をお話していただいた。子どもたちと地域の方々との関わりが深いことも、本校の大きな特徴である。



【地域の方との交流】

### (2) 体育専門アドバイザー

教員4名との関わりが日常的であるために、様々な方々と学ぶ機会を増やすことは、コミュニケーションの場を広げることにもつながってくる。私たちは、日常の授業における外部人材の活用を積極的に取り入れてきた。

県で派遣していただいている「体育専門アドバイザー」には9月に2度、ご来校いただき、児童の実態に応じた指導をしていただくことで、体育面での技能向上につながった。

他にも、特別非常勤講師の先生方にも多くご来



【体育専門アドバイザーの支援】

校いただき、体育、書写等のご指導をいただいている。専門の先生方による個に応じた支援をいただくことで個々の技能が向上することはもとより、こうしたより多くの方々とのかかわりの場そのものが大切であるととらえている。

(3) 企業の出前講座

同様に、企業が行っている出前講座も積極的に活用している。本年度は、国際ビューティー専門学校製菓大学校からパティシエの先生にご来校いただき、ケーキ作りを体験することができた。

プロの技を見て、それを実際にやってみることでその難しさを実感し、一つのケーキを作る工程において、おいしくするための様々な工夫を知るこの体験は、キャリア教育にもつながる。

また、こうした貴重な体験を、公平に全校生が積むことができることも少人数のよさでもある。



【企業による出前講座】

V エピローグ チーム白水

本校の教員は校長、教頭と担任2名の4名である。担任2名はそれぞれ、教務主任と研修主任という大きな校務分掌を担い、また、それ以外にも数多くの校務分掌を担わざるを得ない。

様々な校務や教育活動をそれぞれの校務分掌が中心となって計画立案・運営していくことはもちろんではあるが、風通しの良い職場環境の利を生かし、他の3名ができることを協力していくというスタンスで学校運営を推進している。これが「チーム白水」体制である。

現職教育の推進にあたっては、計画的に位置付けられた研修日だけではなく、日常的に「こんな取り組みをしてみたい」「こんな風に改善していきたい」という意見が共有化され、それに対してそれぞれが思いを重ねて実践へとつながっていくことが多い。

また、児童の実態や学校の現状を踏まえ、国や県、市の施策等をどう本校に生かしていくかという視点については、毎週、校長から職員に配付される「校長室通信」にまとめられ、共有化されていく。

当たり前のことではあるが、それぞれの校務分掌担当者が1人で担うのではなく、全員の思いを重ねて、全員の力を集結し、全員で担うことを日常的に行っている。

全職員による知恵と工夫が本校の教育活動をより充実したものに高め、個々の子どもたちが成長していくことにつながっている。